

実践と理論のあいだに(2)

公式理論と内潜理論

田中 平八

今回は、「内潜理論」構想を説明することに終始してしまつたようです。ここであらためて「公式理論」についての議論に移ります。内潜理論の曖昧さにくらべれば、「公式理論」のほうは、誰にも理解できるきちんとした形態を整えているようにみえるかもしれません。でも、この一見疑うべきようもないかたちで目

の前にあらわれてくることが、実はいちばんの問題なのだというような話からはじめようと思います。

長らく保育学会の会長をされていた山下俊郎先生という方がおられました。この保育界の重鎮が著された『幼児心理学』・『児童心理学』などは、かつて幼稚園や保育園を訪れると、園長室の書棚に必ずといって

いほど並んでいたものでした（若い読者にだけ必要なコメントですが）。その山下先生の学位論文は「用箸運動における成熟と練習」といった内容であったよううかがっています。研究論文としては読んだことがあります。ゲゼル学派を標榜されておられた先生ですから、年齢分布から直接にその発達傾向を把握しようというものでした。

ゲゼルは、発達研究における「氏か育ちか」論争の成熟説（つまり氏側）の代表格のような学者でした。心理学の教科書に、黒い赤ちゃん（？）のシルエットが載っていたのをおぼえておいでの方も多いでしょう。「一方の子はせつせと階段登りの練習をくり返しました。もう一方の子は何もしませんでした。でも、時が満ちるとどちらの子も難なくのぼれるようになります。めでたし、めでたし」といったような解説がついていました。

ずいぶん前に私も簡単な調査を何度かしたことがあ

りますが、いま昼時の学生食堂に行ってみればデータも必要ないことがひとめで了解できるでしょう（ほんとうは異動したので資料がみつからない）。筆記用具の持ち方も基本は箸と同じですからぎこちない人が少なくありません（一緒に行方不明）。山下先生は六、七歳までで調査をうち切っていますが、私が調べた当時すでに大学生の半分は正しく（山下先生の類型でいう最高位の七型で）箸を使えない事態となっていました。だから、成熟の結果として用箸運動は完成しないというのが現在の結論となるでしょう。しかし、大学生の味方をする、パスタ類であればフォークとスプーンを使って実にスマートに食べます。立てた人差し指の周りをシャー



ペンくるりと回す軽業だって相当数の受験生がやれます。

先に釈明をいたしますが、山下先生を批判するのが趣旨ではありません。私は山下先生たちが造り上げられた自由闊達な雰囲気の研究室で育てられたひとり、いわば祖父の話ならさしさわりも少なからう、許してくださるだろうと甘えて、事例に使わせてもらっているのです。

仮にゲゼルにしたがつた解釈を試みてみますと、用箸運動というものは、階段登りのように単に成熟要因だけでは到達しえない複合的なスキルであって、それを発達指標に選んでしまったということかもしれない。理論闘争華やかなりし当時だったら、「育ち派“つまり学習理論にたつ人たちは、わが意を得たりというところでしょう。イデオロギー対立が過去のものになった現在の主流からすると、文化という枠組みを全面に押し出してくるかもしれません。家族シス

テムという側面から変化を解くのも現代流でしょうか。また、古典的にピアジェの用語を使ったら、さらにヴィゴツキーだったらどう考えるか仮想してみたら大学院入試の練習として有益かもしれません。いずれにしろ、ここでは公式理論の中味を問うのが目的ではありません。強調したかったのは、権威ある「公式理論」ですら時代とともに変遷することがありうるという例でした。

次の設問に移りましょう。ごく一般の人たちはいったいどうやって公式理論に触れるのでしょうか。 magari なりにも私たちは研究者、教師が職業ですから、とさおり少しだけ何らかの公式理論を改築する論文を書いて研究者のアイデンティティを維持して、各種公式理論とその根拠となるエピソードを自らの手柄のように学生に分け与えることをなりわいとしております。まことに胡散臭い稼業で、その楽屋裏を知る機会も多いですから、そう深刻になることはありません。しか

し、一般の人たちは、公式理論が産出される現場から、そのニュアンスも含めてじかに情報を手に入れる機会はめったにないでしょう。実のところ、何かさし迫ったことながらを解決しようとしているときに公式理論に接するのは、「専門家」を介してであるばあいが非常に多いのではないのでしょうか。専門家の存在は、とくに実践の場面において重大な意味をもっているはずなのですが、これまであまり議論されてこなかったように思えるのです。

なにげなく聴いていたNHKラジオ三時の相談番組でいまだ記憶から押しやられない内容があります。それは母親からの相談で、高校生の娘は私^が何か言う^と怒り狂って手^がつけられなくなる、娘の最近の性^{にか}かわる行動には納得がいけないけれど、言えばまた荒れるの^がわかるので何も言えない、という相談でした。回答者の質問に誘導されて、かつて家出があったり不登校があったとき、相談所の担当者^に「まわた

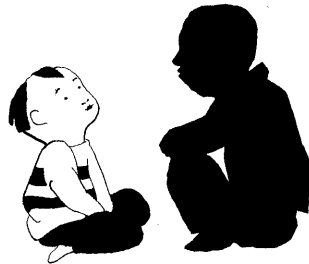
くるむように接しなさい」と言われ、両親ともそれをずっと守ってきたのです、ということでした。本当にカウンセラー^がその通りに言ったかどうかはわかりませんが、とにかく「まわたでくるむ」を金科玉条として、親の本音、不安を口に出したいこともあつたらうに我慢しながら、腫れ物にさわるように過^こしてきたのが手に取るようによくわかります。そのほうが娘さんが穏やかで過^こしてくれるという逃げの姿勢も少しはあつたでしょう。そうしたやりとりを聞きながら……、身体の周囲にちょうど緑日のわたあめ製造器^の中のように「まわた」が漂^たっていて、それを押し^のけて両親の近くに行こうと一生懸命もがいてもたどりつくことはできないし、親の表情も白く薄いまわたの向こうにほんやりとしかとらえることができない、そういう可哀想な女の子のイメージがフロントガラスの向こうに浮かんできて、不覚にも風景が滲^みんできてしまいました。

家庭内暴力がエスカレートした子どもを金属バットで殴り殺した父親の事件が最近ありました。一九七八年にあった開成高校生殺人事件を彷彿とさせる、その教訓がまったくいかされていらない、やりきれない事件でした。メディアの伝えるところ、相談した精神科医だかに、できうる限り手向かわず命令されたことを聞いてやるようにと示唆されたそうで、愚直なほどにそのことを守りつづけたあげくの行為でした。このばあいも、親と子がはだかで直面し合う機会をとうとう逸したまま深刻な事態を迎えてしまったわけです。ラジオ相談のケースと同じように、実際に専門家がどう言ったかではなくて、専門家のことばを公式理論として受け取って自らの行動を縛り、それを遵守することを自己目的化してしまうことが、いちばんおそろしいことだと思えます。

私もひとのことばかり言えないので、わが家に初めて子犬が到着したとき、すぐに遊びたい心を抑え(息

子にも強要し)、天井だけが開いている段ボール箱の中で、指示された通りの期間を過ぎさせました。専門家の言いつけに愚直に従ったのです。わが家の犬は飼い主の行状を顧みるとおおむね立派

なものだと思うのですが、どうしても改善しない困った行動もあります。屋外の音に選択的に反応して吠え立てるのもそのひとつです。最近のテレビ情報番組を見た妻によると、子犬のとき「箱入り娘」にしたのがいけなかったと言います。外が見えないから音だけに敏感にならざるをえなかったということでしょうか。そう言われれば半分折れていた片耳は、しゃきっと立った成犬になってしまいました。テレビの側も犬の



専門家とはいえ、問題行動の遠因が初期の隔離に遡るというのは納得せざるを得ません。私は動物好きの心理屋で、その手の知識はいっぱいあったはずなのに、専門家、といったってペットショップの店員、のひとことで思考停止となつてしまつたわけです。人間を相手にしてもこんなことをたくさんやっているのかなかあ。専門家という縛りがいかに強力かという例示でした。

公式理論は、専門家、専門書（育児書が要注意のようです）などはつきりした対象から取り入れるばかりではないようです。「三つ子の魂百までも」ということわざがあります。私は放送大学の面接授業に長らく参加してきました。さまざまの年齢層の受講者がいますが、いつからか、このことわざについて質問してみることになっています。ほとんどの人が心理学的に考えて正しいと認識しているのです。しかし、その出所と根拠についてたずねるとみなさん途方にくれたような

表情をします。これも多くのひとの行動を規制している公式理論のひとつでしょう。血液型と性格の関連などは、獲得経路が定かではない取り込みのさいたるものと言えると思います。

最後に、こうした設問はいかがでしょうか。ベビーベッドであなたの赤ちゃんが泣いています。泣いているからといってそのたびにすぐ駆けつけてあやしたりしている、いわゆる「抱き癖」がついてしまします。これをよく説明する心理学理論は、学習における条件づけのメカニズムです。赤ちゃんは、しだいに泣けばかまってくれるという関係を学んでしまうというわけです。一方、赤ちゃんが泣くには泣くだけの理由があるだろうという見方もあります。泣くたびにそばによつてあやしてあげれば、安定した細やかな情動をもつ人間に育つはずだとみなすのです。このばあい、準拠する心理学論は、愛着の発達に関するメカニズムです。さて、どちらが正しいでしょう。この話は、昔

読んだ発達心理学の翻訳書の冒頭の部分にあったような気がしているのですが、今回どうしても見つけられませんでした。その答えは、赤ちゃんによるというもので、このころから赤ちゃんの生れながらの特質、氣質の存在を議論し始めたのだと推測されます。現代の発達心理学では、母親への愛着の質を、A、B、Cタイプに分類することがあつてですが（今はDタイプもあるのではか）、そういった話題へとつながっていく初期のころの記述だったのでしょう。

問題は、設問に対する二者択一のその先にあります。私たちはついぶん前、都内の区立保育園へ毎年定期的に通う作業をしておりました。子どもたちの周辺は今ほどかまびすしくありませんでしたが、表面にはあらわれないだけで保育さんたちとついぶん憤慨していたものです。帰宅して子どもがまとわりついてうるさいので座らないという母親、ダイエットしている子どもにも食事を作らない母親など、今でも心がざ

わつきます。

そのときに得た実感なのですが、抱き癖がつくと持論を展開するお母さんは、そんなに放っておかずにもうちよつと赤ちゃんのそばに行つてかまってあげてほしいなと思う人、愛着派のお母さんは、そう神経質にならずにもう少しゆとりをもって赤ちゃんから離れられないかなと思う人。当時から、こんなふうに秩序だつて考えていたわけではありませんが、子どもたちのためにも相互に入れ替わつてほしいと、いつも無力感をおぼえて帰途についたものでした。人間は、自らの潜在理論に整合した公式理論を半意識的に選択してしまう傾向があるのでしょうか。

（秋田県立大学）